開催日	７月４日（月）	会　場	興津小学校　体育館
時間	18：00～19：10	参加人数	21名
計画位置付け	令和１３年度　義務教育学校（興津小・桜が丘小・春採中学校）		
質問	Q1-1　義務教育学校の設置理由として中１ギャップを強調するが、同様の事象は中学ばかりでなく、高校・大学入学時、社会人になったときにも起こり得るもので、子供たちが経験して当然の事象だ。中１ギャップを改革の大きな理由に掲げるのは考え方が違うのではないか。		
回答	A1-1　人生のどの区切りの際にもギャップが起こるものであるが、小学校から中学校の義務教育段階における不適応による不登校などの現象が増えている現状を危惧しているものであり、早く何とかしなければと考えており、今年度、小中連携のジョイントプロジェクトを実施するのは、そういう子ども達の声に耳を傾けて対応してくためである。小学校・中学校の教諭がそれぞれの特色を踏まえて、より強い連携をもって取り組む必要があると考えている。		
質問	Q1-2　同じく理由として学習意欲の低下を挙げているが、小学校・中学校が分かれているのが問題なのではなく、それぞれで学力の取組を強化することで解決できるのではないか。		
回答	A1-2　釧路市の状況として、小学校ではある程度学力テストの成績も上がり、学習意欲もあるのに、中学校になると成績が下がることが課題と捉えている。		
質問	Q1-3　教育上のデメリットで掲げている問題点は、少人数教育で解決できる。クラスの人数が少ないほど、教育が行き届くのではないか。		
回答	A1-3　少人数教育のメリットは承知しているが、少人数教育と小規模校の児童数が少ない問題は別に考えるものである。小規模校において人間関係が固定化してしまって、そこで苦しんでいる子どもをどうするか、また子ども達が集団という中で力を発揮するためにはどうしてけば良いかなど、学校現場で苦慮しながら対応している。		
質問	Q1-4　地域にはそれぞれ特性がある。地域の中の学校に通い、地域の中で教育を受けるのが大事ではないか。あまりにも勉強や学習意欲のことを言うが、私たちが小さい頃は、勉強よりも外で遊ぶことを重視してきた。その中で勉強も出来るという姿があったがそういうほうが良いのでないか。		
回答	A1-4　子供たちにとって、最適な教育環境などういったものかを第一に考えて、今回、小中連携・小中一貫教育を進め、施設一体型の義務教育学校を設置するという方針を持ったものである。		
質問	Q2-1　小規模校のデメリットとしてクラス替えが出来ないことによる人間関係の固定化を挙げているが、中学校区と小学校区が一致する形で義務教育学校を設置することこそ人間関係の固定化を促進するものではないか。		
回答	A2-1　クラスの児童数が増えること、また９学年による異学年交流が実施できることにより、小規模校より社会性を育むことに期待ができると考えている。		

質問	Q2-2	１０年後に義務教育学校設置との話だったが、校舎は未だ決まっていないのか。これはどこかの校舎を使うのか、新しい校舎を建ててから一つの学校にするということなのか。
回答	A2-2	１０年後に義務教育学校設置と申し上げたのは、春採中学校、興津小と桜小によるもので、実施計画年次に記載している。市内では６校の義務教育学校を設置していく案を掲載しており、令和８年度から順次１校ずつ設置していく形となっている。釧路市が昨年策定した学校施設長寿命化計画では８０年建物を使用する方針を打ち出しており、今回の義務教育学校の設置については既存の施設を整備して使用する計画としている。学校を新しく建てるという考えは持っていないが、必要な整備はそれぞれの学校で行っていくことを考えている。
質問	Q3	説明会の中では、その地域を含む学区の現状と課題を説明し、児童数や学級数の推移などの学校再編の根拠を示してほしい。
回答	A3	今後の説明会では、各地域の現状・課題について言及すべく、資料等を作成していく。桜が丘小・興津小・春採中による義務教育学校を設置した場合、令和10年度の推計値では、前期課程では10クラス、後期課程では6クラスとなっている。たたき台では、義務教育学校の開校を令和13年に考えており、恐らくその時点ではさらに児童生徒数が減少することが考えられる。
質問	Q1-5	先ほど説明があったが、中１ギャップとはそんなに子ども達が苦しいと感じるものか。具体的にどういうことか。
回答	Ａ1-5	中１ギャップで苦しんでいる子ども達がいるという説明をさせていただいたが、実際に小学校から中学校に進学した子ども達が、１～２月で不登校になってしまうという事実がある。
質問	Q1-6	不登校の原因は、小学校から中学校に上がったことによってなるものが唯一の原因ということか。
回答	A1-6	不登校の原因はこれが唯一というわけではなく様々ある。中１ギャップの場合、小学校から中学校に上がったときに、勉強が急に難しくなり、小学校までは学級担任制であり、担任の先生が教えてくれていたので相談できたが、中学校では教科によって先生が違うので誰に相談してよいのかわからないということもある。こういうことが起きないよう中学校区内で小中連携を進めて、例えば中学校の英語の先生が小学校の英語の授業に乗り入れて、相談しやすい雰囲気を作っていく等の取組を進めていきたいと考えている。

質問	Q1-7　勉強がわからなくなって不登校になるなら、少ない人数の中で先生が対応して勉強を教えるということが、子ども達それぞれにあった教育ができるのでは。
回答	A1-7　今は、小学校から中学校に入ったときに問題が発生するという話をしている。小学校のときは小規模校で勉強を教えてもらっていたのが、中学校に入ると他の小学校からも入ってくる子ども達もいるので学級の人数も増えるというのが現状。一般的に「中１ギャップ」という言葉は使われなくなってきているものの、現象としては存在していると考えている。
質問	Q4-1　義務教育学校になれば、体育館を９学年で共有することになるが、体育館を使用できる時間数が少なくなるのではないか。
回答	A4-1　春採中、興津小、桜小による義務教育学校では、令和10年の推計で16クラスとなっている。現在、１学年３クラスがある小学校では６学年分、合計18クラスで一つの体育館を使用していることから、授業に支障がでるとは考えていない。
質問	Q4-2　義務教育学校になれば、小学校から中学校までずっと一緒のメンバーで学校生活を送ることになるが、子供たちから新しい人間関係を構築する機会を奪うことになるのではないか。
回答	A4-2　小学校から中学校に上がる段階で新しい環境に対する不適応を起こして不登校になる現状が少しでも緩和されることの方が現在は必要であると考えている。ただ、そういう考えもあると思うのでご意見と承る。
質問	Q5-1　少子化でゆとり教育が行われてきた中で、義務教育学校を設置することは、逆にギャップを生じさせるのではないか。
回答	A5-1　実際に阿寒湖義務教育学校では、規模も小さいということもあるが子ども達と先生の関係が良好である。広島県呉市では、全ての学校を義務教育学校化して大変効果がでているとの報告がある。今ある教育課題を解決するために有効と考えられる方策として小中連携・小中一貫教育を取り入れることを方針としたものであり、小中のギャップを緩やかにすることが目的である。
質問	Q5-2　義務教育学校で９年間のスパンで児童生徒を見守るというが、その間に人事異動が行われば、現実には見守りが行われないのではないか。
回答	A5-2　人事異動は避けられないことである。義務教育学校に限らず引継ぎはしっかり行うものであるが、その先生以外の多くの先生による見守りが続けられる仕組みづくりを施設一体型の義務教育学校により行うものである。
質問	Q5-3　興津小をはじめ、春中、桜小が義務教育学校化されるとの話だが、地域にとって学校がそれぞれ必要だと考えるが、その点どう考えるか。
回答	A5-3　確かに地域のための学校という役割もあるが、子ども達の教育環境がまず第１であり、そのためにはどうしていくかか大切だと考えている。

質問	Q6-1　興津小で実施している放課後チャレンジ教室は、事業として継続されるのか。
回答	A6-1　今、この場で１０年後の事業の継続を確約できるものではないが、放課後児童クラブは必要なものであるため、今後検討すべき課題であると認識している。
質問	Q6-2　チャレンジ教室として行っている同好会では興津小の体育館を使用しているが、義務教育学校になっても春中の体育館を使用できるのか。
回答	A6-2　同好会による体育館の使用などは、今後の開校に向けての協議の中で決定していく。